第１章　うるま市の概要

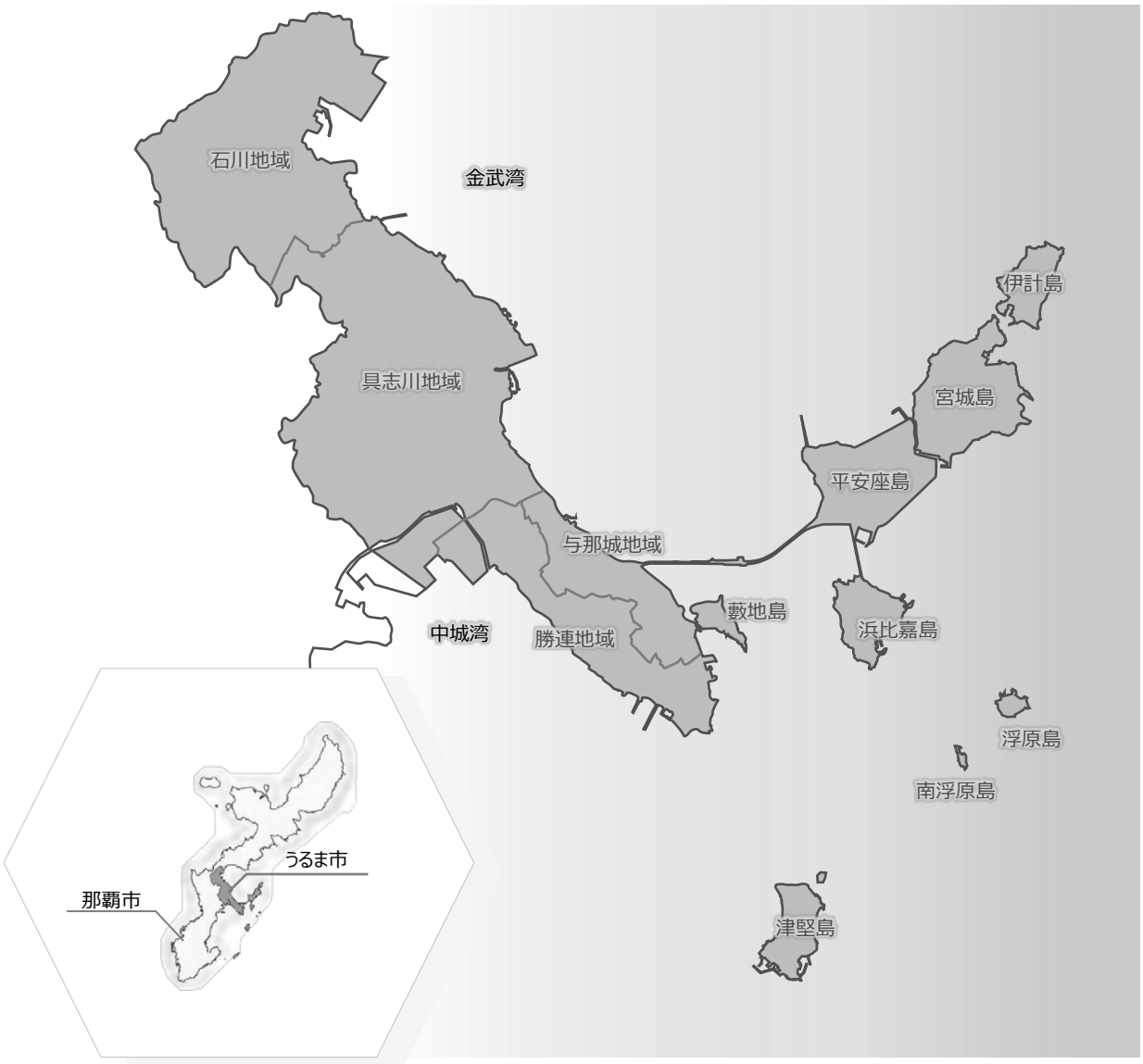
うるま市の概要

1. 位置及び人口

うるま市は、沖縄本島中部の東海岸に位置し、県都那覇市から北東へ約 25 ㎞の距離にあります。重要港湾である金武湾と中城湾に面し、東南部に広がる勝連半島の北方海上および東方海上には、有人、無人の 10 の島々があり、美しい風景と豊かな自然環境に恵まれています。

令和 5 年 4 月 1 日現在の人口は、126,023 人、世帯数は 56,363 世帯であり、面積は 87.02 ㎢となっています。

うるま市の位置と地域名



2. 沿革

うるま市は、平成 17 年 4 月 1 日に具志川市、石川市、勝連町、与那城町の個性豊かな 4 市町が合併して生まれたまちです。

具志川市は、約 4,000 年前に生活が営まれた痕跡を残す古い歴史があり、琉球最古の歌謡集「おもろさうし」に“くしかわ”とあります。豊富な水資源と肥沃で広い土地に恵まれ、かつて砂糖キビの生産が沖縄一を誇っていました。戦後、琉球大学の前身である沖縄文教学校、沖縄外国語学校や農林学校などが続々創設され、沖縄の文教の中心地として発展してきました。

石川市は、琉球王朝時代の寛文 6 年（1666 年）以前は、現在の沖縄市を中心とする越来間切に含まれる農村集落でした。その後、越来間切から分割された美里間切に含まれ、明治 41 年の沖縄県島嶼町村制の施行に伴い誕生した美里村の一行政区として、昭和初期までその状態が続きました。そして、終戦直後、地方行政措置要綱に基づき美里村から分離し、石川市が誕生しました。戦中戦後には、米軍により設置された難民収容所や琉球政府の前身である沖縄諮詢委員会や民政府が設置され、沖縄の政治・経済・教育文化の中心地として発展してきました。

勝連町は、古い文献に「賀津連」「賈慈連」という字で表現されており、1609 年の喜安日記に初めて「勝連」の二字が記されています。12～13 世紀の築城とされる勝連城は、特に城主阿麻和利の時代に最盛期を迎えました。「おもろさうし」には、「きむたか」（心豊か・気高い）と称され、大和の京や鎌倉に例えられるほどの繁栄が謡われており、活発な海外との交易により発展してきました。

また、勝連城跡は、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一つとして、平成 12 年に世界遺産に登録されました。

与那城町は、約 2,500 年前の沖縄貝塚時代中期の沖縄最大の段丘集落跡といわれる「シヌグ堂遺跡」があり、その歴史は古く、17 世紀中頃以前には勝連間切に属していました。その後、西原間切として勝連間切から分離・独立され、第二尚氏王統第 7 代国王尚寧王（しょうねいおう）の父親にあたる与那城王子尚懿（しょうい）が拝領地として授かったと記されています。さらに、平田間切、与那城間切と改名を重ね、沖縄県島嶼町村制の施行など歴史的な変動を経験しながら、発展してきました。また、海中道路（1972 年）や伊計大橋（1982 年）、藪地大橋（1985 年）の完成により、島々の交通の便が飛躍的に向上し、離島苦の解消が図られました。

4 市町は歴史的なつながりが強く、地縁、血縁など住民同士の交流は古くから続いていました。また、海に面し恵まれた地理的条件も含め、生活・経済・文化面において一体的な日常生活圏を構築していました。

「うるま市」が誕生してから、令和 5 年 4 月 1 日で市制 18 周年を迎えました。